

英語科の主張

1 教科で育みたい人間像

英語科では「世界の人々とつながる人」を育みたいと考えている。「世界の人々とつながる人」の土台となるのは「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」と「自他共に大切にできる人間力」である。

「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」をもつ人は、言語や知識のみに頼らず、相手の文化や価値観に配慮しながら、相手の思いをわかろうとしたり、自分の思いをわかってもらおうとしたりすることができる。また、「自他共に大切にできる人間力」をもつ人は、異なる文化や価値観、思いをもつ人を受容し、相手が誰であろうと、話題が何であろうと主体的にかかわろうとすることができる。また、自分の思いや考えを伝えることに価値を見だし、言語的・心理的な困難がある中でも、粘り強くコミュニケーションを図ろうとすることができる。と考える。

「言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーション能力」と「自他共に大切にできる人間力」を土台に、「世界の人々とつながる人」は、自分にとって未知な世界や文化、人々との出会いを肯定的に受けとめ、他者とかわりながら自分の世界を広げることができると私たちは考えている。子どもたちが、多様な他者と豊かな人間関係を築きながら、多様な価値の中で共存し、よりよい世界を創っていくことを願っている。

2 教科で願う子どもの学び

英語科が願う子どもの学びとは、「自分とは異なる思いや価値観をもつ相手と英語でのコミュニケーションを繰り返す中で、自分の思いを『わかってもらおう』とすることと、相手の思いを『わかろう』とすることを大切に、『よりよいコミュニケーション』にせまること」である。自分の思いをわかってもらおうとしたり、相手の思いをわかろうとしたりするためには、互いへの配慮や、粘り強く伝えようとしたり、相手の意図をくみとろうとしたりする意思がないと成り立たない。話し手は、自分の言いたいことを理解してもらうために、より伝わりやすい表現を探したり、より内容にあった表情やジェスチャーで補ったりする。聞き手は、相手が伝えようとしていることを的確に理解するために、質問をして相手の思いを引き出したり、相づちを打つことで自分が理解しているかどうかを伝えたりする。互いに支え合いながらのコミュニケーションを実感することは、「伝わった」「わかった」という達成感や充実感につながり、さらなるコミュニケーションへの足掛かりとなる。また、その体験を積み重ねた子どもたちは知識(knowledge)・態度(attitude)・技能(skill)を有機的に結びつけながら、言語的にも情意的にも豊かなコミュニケーションを楽しんでいくことができる。また、多様な人々や異文化に関心をもち、積極的にかかわろうとすることで、世界の人々とつながっていく。このような学びを実現するために、私たち英語科は、子どもたちが、多様な他者と様々な話題や状況、場面において、互いにわかり合おうとしながら英語を用いてコミュニケーションを繰り返せるような題材選定を大切にしたい。感情を揺さぶる題材は、伝えたい・知りたいという子どもたちのコミュニケーション意欲をかき立てる。また、目的をもって思いや考えを伝え合う場面を題材構想の中で意図的に設定することは、子どもたちが目的を果たすために言葉を主体的に選択しながら自らの思いを伝えようとしたり、相手の真意を推し測ろうとしたりすることにつながる。「伝わった」「わかった」という経験や、「伝えられなかった」「わからなかった」という経験を積み重ねていくことで、さらなるコミュニケーションへの意欲や自信を得たり、多様な語彙使用の必要性を実感し、英語表現を主体的に身につけようとしたり、相手の思いをくみながら対話をしようとしたりすることを期待する。

自分とは異なる思いや価値観をもつ相手と英語でのコミュニケーションを繰り返す中で、自分の思いを「わかってもらおう」とすることと、相手の思いを「わかろう」とすることを大切に、「よりよいコミュニケーション」にせまることで、子どもたちは英語という言語を主体的に学び、多様な語彙を身につけたり、表現の幅を広げたりすることができる。